

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（論文掲載版）

|                  |   |
|------------------|---|
| 報告日              | 2024/5/28   |
| 氏名               | 石野晶大  |
| 指導教員名            | 山田和政  |
| 掲載内容             | <input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など         ※いずれかにチェック  |
| 論文採択・掲載日         | 2023 年 9 月 27 日   |
| 論文掲載雑誌名<br>巻・号・年 | 愛知県理学療法学会誌 第 35 巻 第 2 号 2023 年  |
| doi              | <a href="http://aichi-npopt.jp/dl/info_paper_back/35_2_15.pdf">http://aichi-npopt.jp/dl/info_paper_back/35_2_15.pdf</a>   |
| タイトル             | 回復期リハビリテーション病棟に入棟した脳卒中患者における入棟期間中の身体機能・能力評価の変化量を用いた退棟時の歩行自立度の予後予測－決定木分析を用いた検証－  |
| 発表者名（全員記載）       | 石野晶大 山田和政 藤井博昭 三田琢磨 細井雄一郎   |
| 要旨<br>(250 字程度)  | <p>本研究は回復期リハビリテーション病棟に入棟した脳卒中患者における身体機能・能力評価の変化を加味した退棟時の歩行自立度の予後予測を決定木分析にて検討することを目的とした。対象は回復期脳卒中患者 601 名で、調査項目は年齢、FIM、身体機能・能力評価、CBA、BBS とし、各調査項目の入棟時から入棟 1 ヶ月の変化量（<math>\Delta</math>）を算出した。従属変数を歩行自立の可否、独立変数を各調査項目、各調査項目の<math>\Delta</math>とし、入棟時の運動 FIM の重症度毎で決定木分析を行った。その結果、重度群は第 1 層に<math>\Delta</math>BBS、第 2 層に<math>\Delta</math>運動 FIM と年齢、中等度群は第 1 層に<math>\Delta</math>運動 FIM、第 2 層に入棟時 CBA が抽出され、重症度毎で予測因子の順序性や相互関係は異なり、予後予測を行う上で身体機能・能力の変化を考慮する必要性が示唆された。</p> |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

|                |  |
|----------------|--|
| 報告日            | 2023年12月27日  |
| 氏名             | 村上 ま比呂   |
| 指導教員名          | 越智 亮, 林 尊弘   |
| 掲載内容           | <input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など ) ※いずれかにチェック   |
| 論文採択・掲載日       | 2023年12月27日  |
| 論文掲載雑誌名        | 愛知県理学療法学会誌. 35(2); 90-95, 2023.  |
| 巻・号・年          |  |
| doi            | <a href="http://aichi-npopt.jp/dl/info_paper_back/35_2_14.pdf">http://aichi-npopt.jp/dl/info_paper_back/35_2_14.pdf</a>  |
| タイトル           | 下腿三頭筋筋力トレーニング中の局所振動刺激併用が筋肥大効果に与える影響～超音波診断装置による筋厚の即時的变化を用いた検討～  |
| 発表者名（全員記載）     | 村上ま比呂, 越智 亮, 林 尊弘  |
| 要旨<br>(250字程度) | 本研究は、局所的振動刺激を併用した筋力トレーニングが下腿三頭筋の筋厚や筋電図活動量に与える即時効果について検証した。健常若年者41名を対象とし、振動刺激なしで3分間の踵挙上を行うNV群と、低周波振動刺激を併用したLF群、高周波振動刺激を併用したHF群の3群を設定した。各課題の前後に超音波診断装置による腓腹筋内側頭の筋厚・筋輝度、同筋の筋電図活動量、および足関節受動背屈時の受動トルクを記録した。3群とも課題直後に有意に筋厚が増加し、筋活動量は低下を認め、下腿三頭筋のスティフネスは増加傾向にあった。本研究において、筋力トレーニングに併用した局所振動刺激の筋肥大に対する追加効果は明確にできなかった。今後は、虚弱高齢者を対象に周波数の違いによる筋肥大効果の違いを検証していきたい。 |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

|                  |  |
|------------------|--|
| 報告日              | 2023年12月27日  |
| 氏名               | 野田 篤志  |
| 指導教員名            | 越智 亮   |
| 掲載内容             | <input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など ※いずれかにチェック   |
| 論文採択・掲載日         | 2023年12月27日  |
| 論文掲載雑誌名<br>巻・号・年 | 愛知県理学療法学会誌. 35(2); 111-119, 2023.  |
| doi              | <a href="http://aichi-npopt.jp/dl/info_paper_back/35_2_17.pdf">http://aichi-npopt.jp/dl/info_paper_back/35_2_17.pdf</a>  |
| タイトル             | 座面高と足部接地位置を変更した起立動作が大腿骨近位部骨折患者の下肢荷重量と下肢筋活動量に与える影響  |
| 発表者名（全員記載）       | 野田 篤志, 越智 亮  |
| 要旨<br>(250字程度)   | 本研究は、大腿骨近位部骨折患者における座面高と患側足部位置の変更等の起立方法の違いが下肢荷重量と筋活動量に与える影響を検証した。大腿骨近位部骨折患者7名と下肢機能に異常の無い高齢外来患者6名を対象とした。重心動揺計、表面筋電図、三次元動作解析装置を用い、4条件の起立動作における左右下肢荷重量、主要下肢筋の筋活動量、下肢関節角度を計測した。起立動作の条件として、座面高は対象者の下腿長120%（低）と140%（高）、足部接地位置は左右同位置と患側または利き足を足長の1/2後方位置とし、これらの組み合わせの4条件とした。大腿骨近位部骨折患者において、座面高に関わらず患側足部を後方に位置させた場合に患側下肢荷重量が有意に高値を示した。筋活動量は各条件間で有意差を認めなかった。大腿骨近位部骨折患者において、患側足部を後方に位置させた起立動作は患側下肢荷重量を増加させ、即時的に荷重の左右非対称性を改善させる可能性がある。 |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

|                |  |
|----------------|--|
| 報告日            | 2023年12月27日  |
| 氏名             | 村上 ま比呂   |
| 指導教員名          | 越智 亮, 林 尊弘   |
| 掲載内容           | <input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など ) ※いずれかにチェック   |
| 論文採択・掲載日       | 2023年12月27日  |
| 論文掲載雑誌名        | 愛知県理学療法学会誌. 35(2); 145-148, 2023.  |
| 巻・号・年          |  |
| doi            | <a href="http://aichi-npopt.jp/dl/info_paper_back/35_2_22.pdf">http://aichi-npopt.jp/dl/info_paper_back/35_2_22.pdf</a>  |
| タイトル           | ピクトグラムを用いた新 ADL 表が多職種スタッフの利用満足度と病棟内転倒率に与える影響に関する調査研究   |
| 発表者名 (全員記載)    | 村上ま比呂, 越智 亮, 平田 隼也, 岡村 優奈, 中村麻里子, 仲村 由香, 浅井 憲和, 本田 圭祐  |
| 要旨<br>(250字程度) | 著者が在籍している地域包括ケア病棟において、入院患者の ADL 能力を多職種間で共有するために ADL 表を使用している。今回、従来使用していた ADL 表から、ピクトグラムを取り入れた新しい ADL 表に変更した際の院内スタッフの満足度と、新旧 ADL 表それぞれ 1 年間の患者の病棟内転倒率に変化があるかどうかを調査した。ピクトグラムを導入したことにより迅速に患者の ADL 能力を把握しやすくなり、多職種間連携も円滑に行えるようになった、等の意見が上がり、院内スタッフの満足度は高かった。病棟内転倒率は旧 ADL 表使用時と比較してほとんどの月で減少し、年間で 2.69%の減少を認めた。新 ADL 表のブラッシュアップも含め、今後も多職種間で情報を共有しやすく連携しやすい環境作りが必要であると考えた。 |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

|                            |  |   |    |   |   |       |      |   |    |   |   |   |
|----------------------------|--|---|----|---|---|-------|------|---|----|---|---|---|
| 報告日                        | 2023年11月10日  |   |    |   |   |       |      |   |    |   |   |   |
| 氏名                         | 加藤 彩菜  |   |    |   |   | 指導教員名 | 林 浩之 |   |    |   |   |   |
| 掲載内容                       | <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他         ※いずれかにチェック   |   |    |   |   |       |      |   |    |   |   |   |
| 学会等開催日：                    | 2023   | 年 | 11 | 月 | 3 | 日     | 2023 | 年 | 11 | 月 | 5 | 日 |
| 学会等名称：                     | 第7回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会  |   |    |   |   |       |      |   |    |   |   |   |
| 学会等開催場所：                   | 日本，宮崎県宮崎市，宮崎シーガイアコンベンションセンター   |   |    |   |   |       |      |   |    |   |   |   |
| 研究・講演タイトル：                 | 有酸素運動による亜急性期脳卒中患者1名のBDNFと麻痺側上肢機能の変化：予備的検証  |   |    |   |   |       |      |   |    |   |   |   |
| 発表者名（全員記載）：                | 加藤 彩菜 林 浩之 大古 拓史 富山 直輝   |   |    |   |   |       |      |   |    |   |   |   |
| 研究概要<br>（150字程度）           | <p>本検証では，発症から3か月を経過した亜急性期脳卒中患者を対象として，高強度の有酸素運動によるBDNFと上肢麻痺の変化について確認した．検証の結果，有酸素運動は，亜急性期脳卒中患者においてBDNF増加と麻痺側上肢機能の回復を促す可能性が示唆された．今回の予備的検証によって，発展的なデザインを用いた検証が可能であることを確認できた．</p> |   |    |   |   |       |      |   |    |   |   |   |
| 感想その他<br>アピール欄<br>（100字程度） | <p>学会発表を通じて，BDNFに関する情報交換の機会を得た．また，発表内容の結果に対する解釈について貴重な意見を頂き，今後，検討しなければならない事項を認識できた．今後さらに先行研究を確認し，偏りのない知見を深めたい．</p>   |   |    |   |   |       |      |   |    |   |   |   |
| 写真添付欄<br>2枚以内              |    |   |    |   |   |       |      |   |    |   |   |   |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

|                            |  |       |                  |
|----------------------------|--|-------|------------------|
| 報告日                        | 2023年11月9日   |       |                  |
| 氏名                         | 村上 ま比呂   | 指導教員名 | 越智 亮, 林 尊弘       |
| 掲載内容                       | <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他                    ※いずれかにチェック    |       |                  |
| 学会等開催日：                    | 2023   | 年     | 11月3日～2023年11月5日 |
| 学会等名称：                     | 第7回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会  |       |                  |
| 学会等開催場所：                   | 宮崎県宮崎市   |       |                  |
| 国名, 都市名, 会場名               | コンベンションセンター  |       |                  |
| 研究・講演タイトル：                 | 虚弱高齢者に対する起立立位保持は腓腹筋筋厚の即時的変化をもたらす<br>—パイロットスタディー—   |       |                  |
| 発表者名（全員記載）：                | 村上 ま比呂, 越智 亮, 林 尊弘, 宇佐美 雄斗   |       |                  |
| 研究概要<br>(150字程度)           | 本研究は、虚弱高齢者を対象に超音波診断装置（以下、エコー）を用いて運動前後における筋厚の即時的変化の評価を行った。入院患者6名を対象に下腿三頭筋を8か所に分けて筋厚の測定を行った。3分程度の起立立位保持運動でも、虚弱高齢者にとって筋厚を即時的に変化させることができた。 |       |                  |
| 感想その他<br>アピール欄<br>(100字程度) | 学会に参会し、愛知県に限らず日本全国の方々と交流することができた。また、演題発表に対してはリハビリ専門職以外の、医師からも意見を頂くことができた。今後の研究を進めるうえでの課題となる意見を見直し、次の研究に活かしていきたい。                       |       |                  |
| 写真添付欄<br>2枚以内              |    |       |                  |

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

|                            |  |   |   |   |       |            |   |      |   |    |   |   |   |
|----------------------------|--|---|---|---|-------|------------|---|------|---|----|---|---|---|
| 報告日                        | 2023年10月3日   |   |   |   |       |            |   |      |   |    |   |   |   |
| 氏名                         | 村上 ま比呂   |   |   |   | 指導教員名 | 越智 亮, 林 尊弘 |   |      |   |    |   |   |   |
| 掲載内容                       | <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他                 ※いずれかにチェック   |   |   |   |       |            |   |      |   |    |   |   |   |
| 学会等開催日：                    | 2023   | 年 | 9 | 月 | 30    | 日          | ~ | 2023 | 年 | 10 | 月 | 1 | 日 |
| 学会等名称：                     | 第39回 東海北陸理学療法学会学術大会  |   |   |   |       |            |   |      |   |    |   |   |   |
| 学会等開催場所：                   | 石川県小松市   |   |   |   |       |            |   |      |   |    |   |   |   |
| 国名, 都市名, 会場名               | 團十郎芸術劇場うらら, サイエンスヒルズこまつ  |   |   |   |       |            |   |      |   |    |   |   |   |
| 研究・講演タイトル：                 | 超音波診断装置を用いた虚弱高齢者の下腿三頭筋筋厚評価の再現性   |   |   |   |       |            |   |      |   |    |   |   |   |
| 発表者名（全員記載）：                | 村上 ま比呂, 越智 亮, 林 尊弘, 宇佐美 雄斗   |   |   |   |       |            |   |      |   |    |   |   |   |
| 研究概要<br>(150字程度)           | 本研究は、虚弱高齢者の超音波診断装置を用いた腓腹筋の筋厚測定において、筋腹内外側4か所ずつ計8か所を測定し、各部位毎の日間信頼性を検証した。筆頭演者一名の検査者で10名10肢を対象とし、8か所全てにおいて高い日間信頼性を得ることができた。複数個所の筋厚測定は、筋全体の形状を捉えることに繋がり、腫脹や筋萎縮・肥大等の形態の変化をより詳細に捉えることができる。今後は複数名の検査者で検者間信頼性が得られるか検証する必要がある。 |   |   |   |       |            |   |      |   |    |   |   |   |
| 感想その他<br>アピール欄<br>(100字程度) | 学会に参加し、下腿三頭筋以外の筋厚の測定方法や、筋厚の変化からみる運動負荷効果の考え方について学ぶことができた。研究成果発表においては、エコーのプローベの当て方や、検者が複数名になった場合の再現性について、自身の研究の発展につながる質問や意見をいただいた。次の研究に向けて努力していきたい。  |   |   |   |       |            |   |      |   |    |   |   |   |
| 写真添付欄<br>2枚以内              |    |   |   |   |       |            |   |      |   |    |   |   |   |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

|                |  |
|----------------|--|
| 報告日            | 2023年9月8日  |
| 氏名             | 木納潤一   |
| 指導教員名          | 渡邊和子   |
| 掲載内容           | <input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など         ※いずれかにチェック   |
| 論文採択・掲載日       | 2023年6月30日   |
| 論文掲載雑誌名        | 精神障害とリハビリテーション 27 (1), 73-80, 2023   |
| 巻・号・年          | ※印刷中の場合は雑誌名のみ記載  |
| doi            |  |
| タイトル           | 統合失調症患者に対する運動課題と認知課題の多重課題プログラム Cognitive Activation Therapy (CAT)開発に向けた予備的研究   |
| 発表者名 (全員記載)    | <u>木納潤一</u> 、坂井一也、渡邊和子<br><small>※筆頭著者は一番前に記入し、自分に下線</small>   |
| 要旨<br>(250字程度) | <p>我々は、統合失調症患者に対する運動課題と認知課題の多重課題プログラム Cognitive Activation Therapy (以下、CAT) に、社会認知活性化の要素を付加した改良版 CAT を作成した。本研究は、改良版 CAT における認知機能リハビリテーションプログラムとしての効果を検証する予備的研究である。7名の統合失調症患者が参加し、改良版 CAT を週2回、40分/回、6ヶ月間実施した。神経認知、社会認知、リカバリー、精神症状、社会機能について、介入前6ヶ月間と介入6ヶ月間の変化量を比較した。また介入前半と後半における振り返りシートの記述内容を比較分析した。その結果、神経認知、社会認知では改善度に有意差を認めなかった。参加者の改良版 CAT に対する満足度は高く、Recovery Assessment Scale (RAS) の下位項目で有意に改善度が高く、振り返りシートでは相手の表情に関する記述が介入後半に有意に増加した。今回の結果から改良版 CAT の修正点と、さらなる効果検証の必要性を確認できた。</p> |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

|                            |   |   |   |   |    |       |         |   |   |   |   |   |
|----------------------------|---|---|---|---|----|-------|---------|---|---|---|---|---|
| 報告日                        | 2023年8月17日  |   |   |   |    |       |         |   |   |   |   |   |
| 氏名                         | 榛地 佑介   |   |   |   |    | 指導教員名 | 太田 進 教授 |   |   |   |   |   |
| 掲載内容                       | <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他                 ※いずれかにチェック                                  |   |   |   |    |       |         |   |   |   |   |   |
| 学会等開催日：                    | 2023  | 年 | 6 | 月 | 29 | 日     | 2023    | 年 | 7 | 月 | 1 | 日 |
| 学会等名称：                     | 日本スポーツ整形外科学会 2023   |   |   |   |    |       |         |   |   |   |   |   |
| 学会等開催場所：                   | リーガロイヤルホテル広島、広島県立国際体育館  |   |   |   |    |       |         |   |   |   |   |   |
| 国名，都市名，会場名                 |   |   |   |   |    |       |         |   |   |   |   |   |
| 研究・講演タイトル：                 | ACL 再建術後早期における軟骨変性の進行と膝伸展制限，膝関節筋力との関連   |   |   |   |    |       |         |   |   |   |   |   |
| 発表者名（全員記載）：                | 榛地佑介，大田進，安井淳一郎<br>※発表者は一番前に記入し，自分に下線  |   |   |   |    |       |         |   |   |   |   |   |
| 研究概要<br>（150字程度）           | 本研究は，ACL 再建術後 1～2 年程度経過した抜釘時の軟骨変性の進行と膝関節伸展制限，膝関節筋力との関連について調査した．ACL 再建術前の膝関節伸展制限と H/Q 比の術前からの改善が軟骨変性を予防する可能性が示唆された．今後は半月板処置の有無や軟骨変性の変化量や進行度との関連について詳細に検証していく必要がある． |   |   |   |    |       |         |   |   |   |   |   |
| 感想その他<br>アピール欄<br>（100字程度） | 学会発表を通じて，膝関節機能以外に生活背景などの因子も考慮することが詳細な原因の解明につながるのではというご意見を頂いた．データの抽出方法などのデザインも含めて今後の検討を行い発展させていきたい．  |   |   |   |    |       |         |   |   |   |   |   |
| 写真添付欄<br>2枚以内              |   |   |   |   |    |       |         |   |   |   |   |   |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

|                            |   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
|----------------------------|---|---|---|---|----|-------|------|------|---|---|---|---|---|
| 報告日                        | 2023年8月16日  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 氏名                         | 石橋 心  |   |   |   |    | 指導教員名 | 太田 進 |      |   |   |   |   |   |
| 掲載内容                       | <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他         ※いずれかにチェック  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 学会等開催日：                    | 2023  | 年 | 7 | 月 | 30 | 日     | ~    | 2023 | 年 | 8 | 月 | 3 | 日 |
| 学会等名称：                     | XXIX Congress of International / Japanese Society of Biomechanics   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 学会等開催場所：                   | 福岡県 福岡市 福岡国際会議場   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 研究・講演タイトル：                 | Effect of the draw-in maneuver on lumbar spine and hip motion during sit-to-stand for prevention of low back pain and urinary incontinence                                |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 発表者名（全員記載）：                | 石橋 心, 太田 進  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 研究概要<br>(150字程度)           | <p>起立動作にDIをした際の腰椎と股関節角度，体幹筋活動への即時効果を検証。三次元動作解析装置で角度を算出，筋電図で腹直筋，外・内腹斜筋，腹横筋，大殿筋を計測した。起立動作中のDIは最大腰椎屈曲角度が減少し，腹直筋の筋活動が増加せず腹斜筋と腹横筋の筋活動を選択的に増加させた。この結果は腰痛や尿漏れ予防の一助になる可能性がある。</p> |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 感想その他<br>アピール欄<br>(100字程度) | <p>人生初の学会発表が国際学会の口頭発表で大変緊張しました。他分野の発表を聞き，まだ自分の視野は狭いと感じました。また，英語のニュアンスまで理解できていないので部分的にしか内容が分かりませんでした。今後は様々な分野の意見を理解するために英語でのコミュニケーション能力を養って行きたいです。</p>                     |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 写真添付欄<br>2枚以内              |    |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

|                            |  |   |   |   |    |       |      |   |   |   |   |   |
|----------------------------|--|---|---|---|----|-------|------|---|---|---|---|---|
| 報告日                        | 2023年8月16日   |   |   |   |    |       |      |   |   |   |   |   |
| 氏名                         | 村上慈葉   |   |   |   |    | 指導教員名 | 太田進  |   |   |   |   |   |
| 掲載内容                       | <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他         ※いずれかにチェック   |   |   |   |    |       |      |   |   |   |   |   |
| 学会等開催日                     | 2023   | 年 | 7 | 月 | 30 | 日     | 2023 | 年 | 8 | 月 | 3 | 日 |
| 学会等名称                      | XXIX Congress of International Society of Biomechanics<br>XXIX Congress of Japanese Society of Biomechanics  |   |   |   |    |       |      |   |   |   |   |   |
| 学会等開催場所                    | 日本, 福岡, 福岡国際会議場  |   |   |   |    |       |      |   |   |   |   |   |
| 研究・講演タイトル                  | The effect of draw-in maneuver on knee joint function and thoracic kyphosis angle in patients with osteoarthritis of the knee  |   |   |   |    |       |      |   |   |   |   |   |
| 発表者名 (全員記載)                | 村上慈葉, 太田進, 藤田玲美, 大古拓史, 川崎慎二<br><small>※発表者は一番前に記入し, 自分に下線</small>  |   |   |   |    |       |      |   |   |   |   |   |
| 研究概要<br>(150字程度)           | 変形性膝関節症（膝 OA）症例に対し、Draw-in maneuver（DI）歩行介入を6週間、1日20分行い、膝機能および胸椎後弯角度への効果を検証した。結果は、KOOSに有意差はなかったが、膝痛（VAS）は臨床的に有意に低下した。また、介入前と介入後の正常姿勢を6週間比較すると、胸椎後弯角が減少し、姿勢が有意に改善した。DI歩行は膝OAに対する歩行修正として有用であることが示唆された。 |   |   |   |    |       |      |   |   |   |   |   |
| 感想その他<br>アピール欄<br>(100字程度) | 今回、ポスターでの発表を行った。発表を通して多くの海外の方とコミュニケーション・ディスカッションすることができた。言語の違う人とのコミュニケーションをとる難しさを改めて感じたが、貴重な経験となった。  |   |   |   |    |       |      |   |   |   |   |   |
| 写真添付欄<br>2枚以内              |  |   |   |   |    |       |      |   |   |   |   |   |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

|                            |   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
|----------------------------|---|---|---|---|----|-------|------|------|---|---|---|---|---|
| 報告日                        | 2023年7月7日   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 氏名                         | 村上ま比呂   |   |   |   |    | 指導教員名 | 越智 亮 |      |   |   |   |   |   |
| 掲載内容                       | <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 学会等開催日：                    | 2023  | 年 | 6 | 月 | 29 | 日     | ～    | 2023 | 年 | 7 | 月 | 2 | 日 |
| 学会等名称：                     | 第60回日本リハビリテーション医学会  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 学会等開催場所：                   | 福岡県福岡市 福岡国際会議場，福岡サンパレス，福岡国際センター   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 研究・講演タイトル：                 | 局所的振動刺激を併用した下腿三頭筋の筋厚と筋特性の即時的変化  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 発表者名（全員記載）：                | 村上 ま比呂，越智 亮，林 尊弘  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 研究概要<br>（150字程度）           | 本研究は，局所的振動刺激を併用した筋力トレーニングの筋厚と筋特性の即時効果について超音波診断装置や受動トルク測定器を用いて検証した．振動刺激なしのNV群と，低周波数のLF群，高周波数のHF群の3群間において，振動刺激周波数の違いによる筋肥大効果は明確にできなかった．今後は，虚弱高齢者を対象に周波数の違いによる筋肥大効果の違いを検証していきたい． |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 感想その他<br>アピール欄<br>（100字程度） | 学会に参加し，振動刺激を用いた物理療法の様々な効果と治療メカニズムの生理的背景について学ぶことができた．振動刺激を扱う研究を進めていくうえでとても良い機会になった．また，研究成果発表においては，自身の研究の発展につながる様々な視点からの質問や意見をいただいた．次の研究に向けて努力していきたい．                           |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 写真添付欄<br>2枚以内              |   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

|                            |  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
|----------------------------|--|---|---|---|----|-------|------|------|---|---|---|---|---|
| 報告日                        | 2023年7月6日  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 氏名                         | 野田 篤志  |   |   |   |    | 指導教員名 | 越智 亮 |      |   |   |   |   |   |
| 掲載内容                       | <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他         ※いずれかにチェック   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 学会等開催日：                    | 2023   | 年 | 6 | 月 | 29 | 日     | ～    | 2023 | 年 | 7 | 月 | 2 | 日 |
| 学会等名称：                     | 第60回日本リハビリテーション医学会学術集会   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 学会等開催場所：                   | 福岡国際会議場，福岡サンパレス，福岡国際センター   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 国名，都市名，会場名                 |  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 研究・講演タイトル：                 | 座面高と足部接地位置の違いが大腿骨近位部骨折患者の起立動作に与える影響  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 発表者名（全員記載）：                | 野田 篤志，越智 亮   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 研究概要<br>(150字程度)           | <p>大腿骨近位部骨折患者において，術後疼痛が緩解した後でも患側下肢に十分な荷重ができない症例がしばしば認められる．同患者を対象に，座面高と足部接地位置を変更した起立動作が荷重量と筋活動量に与える影響を検証した．患者において通常の起立では患側下肢荷重量が減少していたが，患側足部接地位置を後方にずらすと患側の下肢荷重量が増加することが分かった．患側下肢筋活動量は各起立動作間で変化を認めなかった．今後は起立トレーニングとして用いるために更なる検討が必要である．</p> |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 感想その他<br>アピール欄<br>(100字程度) | <p>学会発表を通して様々な意見を頂けたため，今後の研究に活かしていきたい．また発表を通して研究の課題点を多く見出せることができたため，研究内容を見直し，今後の研究を進めていきたい．</p>  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 写真添付欄<br>2枚以内              |  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

|                            |  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
|----------------------------|--|---|---|---|----|-------|------|------|---|---|---|---|---|
| 報告日                        | 2023年7月1日  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 氏名                         | 判治真也   |   |   |   |    | 指導教員名 | 越智 亮 |      |   |   |   |   |   |
| 掲載内容                       | <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 学会等開催日：                    | 2023   | 年 | 6 | 月 | 29 | 日     | ～    | 2023 | 年 | 7 | 月 | 2 | 日 |
| 学会等名称：                     | 第60回日本リハビリテーション医学会学術集会   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 学会等開催場所：                   | 福岡国際会議場，福岡サンパレス，福岡国際センター   |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 国名，都市名，会場名                 |  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 研究・講演タイトル：                 | 後方転倒に対する反応的ステップング中の下肢筋活動と運動学的分析  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 発表者名（全員記載）：                | 判治真也，太田大貴，越智亮  |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 研究概要<br>（150字程度）           | <p>後方転倒は圧迫骨折等の重篤な障害を引き起こす要因となり，転倒を防ぐ為には転倒回避動作である反応的ステップが重要である．本研究は，実験的に後方への転倒回避ステップを誘発し，その際の支持脚と振り出し脚の下肢筋電図活動を調査した．結果，膝関節伸展筋，膝関節屈曲筋，股関節伸展筋，足関節背屈筋が後方への転倒回避ステップに関与する筋であると考えられた．</p>                                     |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |
| 感想その他<br>アピール欄<br>（100字程度） | <p>今回の発表において，研究の安全性についてご質問を受けました．本研究は健康者を対象としており，また転倒防止ハーネスの使用，転倒しそうになった場合に検査者がすぐに支える体制をとっている等，安全面に万全に配慮していることを回答しました．この質問のように，一般的に後方転倒回避ステップは前方や側方よりも高い運動能力が要求されると考えられています．将来的に高齢者の後方転倒回避動作についても研究をすすめていきたいと思えます．</p> |   |   |   |    |       |      |      |   |   |   |   |   |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

|                |   |
|----------------|---|
| 報告日            | 2023/05/30  |
| 氏名             | 加藤彩菜  |
| 指導教員名          | 林浩之   |
| 掲載内容（          | <input type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input checked="" type="checkbox"/> その他紀要など   |
| 論文採択・掲載日：      | 2023 年 5 月 25 日   |
| 論文掲載雑誌名        | Cureus, 15(5), 2023   |
| 巻・号・年          |   |
| doi            | 10.7759/cureus.39502  |
| タイトル：          | Aerobic Exercise for Upper Limb Function in a Patient With Severe Paralysis With Subacute Stroke: A Case Report   |
| 発表者名（全員記載）：    | <u>Ayana Kato</u> , Hiroyuki Hayashi  |
| 要旨<br>(250字程度) | 脳卒中後の上肢重度麻痺に対するアプローチの有効性は限られる。本 Case report は、脳卒中発症から約 3 カ月経過した患者に、有酸素運動を実施することによって、上肢機能改善がみられるか検証した。本症例には、作業療法に加え、1 日 3 時間、週 7 回 4 週間の上肢自主トレーニングを実施した。その後、自主トレーニングに 1 日 30 分、週 7 回 4 週間の頻度で有酸素運動を追加した。上肢機能に関する経時的なデータを分析し、有酸素運動は上肢機能回復に有効的に作用する可能性を示した。有酸素運動を作業療法に取り入れることで上肢機能の改善が促進されるかもしれない。 |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

|                |   |
|----------------|---|
| 報告日            | 2023/3/1  |
| 氏名             | 佐藤 克成   |
| 指導教員名          | 渡邊 和子, 山田和政   |
| 掲載内容           | <input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など   |
| 論文採択・掲載日       | 2023 年 2 月 17 日   |
| 論文掲載雑誌名        | Aging Clinical and Experimental Research. 2023 May;35(5):987-994.   |
| 巻・号・年          |   |
| doi            | 10.1007/s40520-023-02374-2  |
| タイトル           | Effects of dance video game training on cognitive functions of community-dwelling older adults with mild cognitive impairment   |
| 発表者名（全員記載）     | <u>Katsunari Sato</u> , Akira Ochi, Kazuko Watanabe, Kazumasa Yamada  |
| 要旨<br>(250字程度) | ダンスビデオゲーム（DVG）は、高齢者の認知機能や身体機能の改善に対して有益な効果を示しているが、軽度認知機能障害（MCI）を有した高齢者を対象とした報告はほとんどない。本研究は、DVG トレーニングが MCI 高齢者の認知機能および大脳の前頭葉活動に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。高齢者を認知機能テストに基づいて、MCI 群 10 名と正常認知機能群 11 名に分け、週 1 日、1 回 60 分、計 12 週間の DVG トレーニングを行っていただいた。12 週間の DVG トレーニングは、MCI 群の認知機能テストの成績を有意に改善させ、認知課題（ストループテスト）中の前頭葉活動を有意に増加させたことから、DVG は MCI 高齢者のトレーニングとして有用であることが示唆された。 |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

|                  |  |
|------------------|--|
| 報告日              | 2023/03/01   |
| 氏名               | 安井淳一郎  |
| 指導教員名            | 太田進  |
| 掲載内容             | <input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など  |
| 論文採択・掲載日         | 2023 年 2 月 21 日  |
| 論文掲載雑誌名<br>巻・号・年 | Orthop J Sports Med. 2023 Feb 21;11(2):23259671231151410.  |
| doi              | 10.1177/23259671231151410  |
| タイトル             | Preoperative Loss of Knee Extension Affects Knee Extension Deficit in Patients After Anterior Cruciate Ligament Reconstruction   |
| 発表者名（全員記載）       | <u>Junichiro Yasui</u> , Susumu Ota, Kazutoshi Kurokouchi, Shigeo Takahashi  |
| 要旨<br>(250 字程度)  | <p><b>【対象と方法】</b><br/>膝前十字靭帯(Anterior Cruciate Ligament: ACL)再建術前患者 389 名を対象に、Heel Height Difference (HHD) にて術前の膝伸展制限を測定し、HHD2cm 以上群 55 人と HHD2cm 未満群 334 人に分け、伸展制限の推移を術後 12 か月まで縦断的に調査した。</p> <p><b>【結果】</b> 術後 12 か月の伸展制限は HHD2cm 未満群で 13.8%、HHD2cm 以上群で 38.2%に存在した。</p> <p><b>【考察】</b> ACL 再建術前の膝伸展制限は術後 12 か月まで影響する可能性があるため、手術前から伸展制限改善に取り組む必要がある。</p> |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

|                            |   |   |   |   |    |       |      |   |   |   |    |   |
|----------------------------|---|---|---|---|----|-------|------|---|---|---|----|---|
| 報告日                        | 2023年2月   |   |   |   |    |       |      |   |   |   |    |   |
| 氏名                         | 村上ま比呂   |   |   |   |    | 指導教員名 | 越智 亮 |   |   |   |    |   |
| 掲載内容（                      | <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他   |   |   |   |    |       |      |   |   |   |    |   |
| 学会等開催日：                    | 2023  | 年 | 2 | 月 | 18 | 日     | 2023 | 年 | 2 | 月 | 19 | 日 |
| 学会等名称：                     | 日本物理療法合同学術大会 2023   |   |   |   |    |       |      |   |   |   |    |   |
| 学会等開催場所：                   | 東京都文京区，順天堂大学御茶の水センタービル（オンライン同時開催）   |   |   |   |    |       |      |   |   |   |    |   |
| 研究・講演タイトル：                 | 局所的振動刺激を併用した下腿三頭筋トレーニング後の筋厚，筋輝度の即時的変化について   |   |   |   |    |       |      |   |   |   |    |   |
| 発表者名（全員記載）：                | 村上 ま比呂，越智 亮，林 尊弘  |   |   |   |    |       |      |   |   |   |    |   |
| 研究概要<br>（150字程度）           | 本研究は，局所振動刺激を併用した筋力トレーニングの即時効果について超音波診断装置を用いて検証した．局所振動刺激を併用した群と併用しなかった群の両群とも，トレーニング前後の筋厚と筋輝度の変化に違いが認められなかったため，今回は局所振動刺激の有効性について明らかにできなかった．今後は振動刺激の方法や設定を変更し，継続して研究をすすめていきたい． |   |   |   |    |       |      |   |   |   |    |   |
| 感想その他<br>アピール欄<br>（100字程度） | 学会に参加し，物理療法的知識を専門的に学ぶいい機会になった．自身の研究に関連している研究も多く発表されており，また自身の研究の発展につながる様々な視点からの質問や意見をいただいた．研究内容を見直し，次の研究に向けて進めていきたい．   |   |   |   |    |       |      |   |   |   |    |   |
| 写真添付欄<br>2枚以内              |   |   |   |   |    |       |      |   |   |   |    |   |

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

|                  |  |
|------------------|--|
| 報告日              | 2022年6月2日  |
| 氏名               | 鈴木 隆史  |
| 指導教員名            | 太田 進   |
| 掲載内容             | <input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など  |
| 論文採択・掲載日         | 2023年7月 日  |
| 論文掲載雑誌名<br>巻・号・年 | 日本義肢装具学会誌. 39巻3号195-201, 2023.   |
| doi              |  |
| タイトル             | 高齢者の車椅子座位における仙骨座圧及び骨盤前傾に対する形状記憶合金コルセットの装着効果について  |
| 発表者名（全員記載）       | 鈴木隆史, 太田進  |
| 要旨<br>(250字程度)   | <p>高齢者の車椅子座位におけるリスクとして、骨盤後傾による仙尾骨部の褥瘡が挙げられる。車椅子自体に褥瘡対策を施したものに変更するといった報告は多いが、標準型車椅子を利用した仙尾骨部の褥瘡予防の報告は少ない。そこで、骨盤を前傾させる効果が期待できる機構のある形状記憶合金コルセットを装着し、仙尾骨部の座圧の減少効果を検証した。本コルセットの装着の有無で比較した結果、本コルセットを装着した場合に仙尾骨部座圧は有意に低値を示した。そのため、本コルセットの装着は標準型車椅子に応用可能な仙尾骨部の褥瘡予防の一つとして考えられた。</p> |